

●大正時代は、大変たくましく、多様な可能性を秘めた時代だった

▽象徴する出来事が「大正政変」

大正元年12月から 翌年2月にかけて

2か月余りの間に 2つの内閣が倒れた政変劇

「大正政変」

明治天皇が亡くなり元号が大正に改まると、陸軍は2個師団(約5万人)増設を強硬に要求した。第2次西園寺公望内閣(敵愾)が、「財政上とても無理だ」と拒否すると、陸軍大臣が単独辞職した。陸軍は「軍部大臣現役武官制」(陸海軍大臣は現役の大將、中將に限る)を盾にとって後任を送らず、陸軍が内閣を倒した最初の例に。

代わって、長州出身の内大臣兼侍従長桂太郎(陸軍大臣)が第3次内閣を組織したが、「憲政擁護・閥族打破」の国民の大合唱の前にわずか53日、内閣史上最短の記録で崩壊した。世論、民衆の力が内閣を倒した最初の例となった。

▽「軍部大臣現役武官制」は

軍部が 内閣の喉元に 突き付けた匕首

軍事が政治を左右する 悪例を作った

▽とかく 政党の宣伝に 利用されてきた新聞が

逆に 政党のシリを叩いて 世論を呼び起こし

言論機関としての地位を 確立した第一歩

▽また 政党が 大きな力を持つようになり

日本の政党政治の 出発点になった

●大正新時代と共に、時代は新しい変化、現状打破を求めて動きつつあった

「明治の終わり」の衝撃

明治45年7月20日、突然官報号外が発行され、明治天皇が尿毒症で重体であることが伝えられた。とたんに東京株式市場は大暴落、警視庁は両国の川開きを中止させた。東京の市電は、堀端のレールにボロ布を敷いて徐行運転し、宮城前には平癒を祈る国民が押し掛けた。

宮内省は30日、「午前零時43分崩御」と公式に

大正のイメージ

大正天皇が病気がちで、在位15年と短かったこともあり、明治(45年)と昭和(63年)に挟まれた「谷間の時代」。太平洋戦争で一番多くの犠牲者を出したのも大正世代。「おれは河原の枯れすすき」「籠の鳥」といった、やるせない、もの悲しい響きの歌のせいかな、暗い、沈滞した時代を連想するが…。

「船頭小唄」と「籠の鳥」

大正11年末、野口雨情作詞の「おれは河原の枯れすすき／同じお前も枯れすすき／どうせ二人はこの世では／花の咲かない枯れすすき」が大流行した。第1次世界大戦後の恐慌の嵐の中、どうにもならない生活の苦しさが民衆の共感呼んだ。

12年に関東大震災が起こり、翌年爆発的に流行ったのが、「逢いたさ見たさにこわさを忘れ／暗い夜道をただ一人／逢いにきたのになぜ出て逢わぬ／僕の呼ぶ声忘れたか／あなたの呼ぶ声忘れはせぬが／出るに出入れぬ籠の鳥」小学生まで歌い出し、文部省は歌唱禁止の通達を出したが、経済不況が深刻になる中、逃げ場のない民衆はまさに「籠の鳥」であり、そのやりきれなさが歌の流行に。

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。公家の名門・清華家の出。明治4年渡仏しソルボンヌ大に学ぶ。駐奥・駐独公使を経て27年文相。33年枢密院議長。36年政友会総裁となり39年首相。44年第2次内閣を組織したが陸軍の増師問題で総辞職。大正の末からは、最後の元老として後継首相の奏請に当たった

発表したが、内務大臣原敬は日記に「午後十時四十分(29日)天皇陛下崩御あらせらる。崩御は三十日零時四十三分として発表する事に宮中に於て御決定ありたり、踐祚の御式等挙行の時間なき為めならんと拝察せり」

「原敬日記」

全巻82冊。年代は、原が19歳の明治8年から65歳で暗殺される大正10年にわたり、明治・大正の政治史を知る上で貴重な資料。戦後公開。

▽西園寺内閣と 元老山県有朋の
政治感覚の違い 対立が 次第に表面化

山県が勅語案にクレーム

ご大喪は9月13日に青山斎場で行なわれることになり、経費を追加予算で支出するため、臨時議会を召集して承認を求めることにした。

ところが政府が用意した開院式の勅語案「朕新二大統ヲ継キ祖宗ノ威靈ト臣民ノ忠良トニ倚リ先帝ノ遺業ヲ失墜セサラン事ヲ期ス」に、山県からクレームが出て、「臣民ノ忠良トニ倚リ」が削除された。

山県は、天皇が臣民の忠良に支えられているとのイメージを嫌ったのか — 西園寺内閣が異例ともいえる措置で天皇の容体をその都度発表したのも、「国民は天皇と共にある」との思いからだだったが、原は日記に「元老がかくの如き大事に国民の参加を好まないのだ」

▽大阪朝日論説記者・丸山幹治は 大正2年元日付に
「吾人は何故となく新時代の気配を感じ」

▽明治の人は 近代国家を目指し

日清・日露の大戦争に 歯を食い縛って頑張った
明治の終わりで がんじがらめの束縛が解け

精神的な自由を求める 空気が生まれてきた

▽読売新聞も 社説「大正国民の覚悟」で

「元来明治の文明は形式の文明なりき。教育の事は無論とし、憲法其のものも未だ形式の完備を成し遂げしに過ぎざりき。実質的に立憲国民たる証左を示すのは、大正国民われわれの責任」

桂 太郎(かつら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 長州藩出身。陸軍大将。陸軍次官、台湾総督歴任。明治31年陸相。34年第1次内閣を組織し日英同盟締結、日露戦争を遂行。41年第2次内閣で韓国併合。大正天皇即位と共に、大正1年8月内大臣兼侍従長。西園寺内閣総辞職で12月、第3次内閣を組織したが、第1次護憲運動で53日で崩壊

原 敬(はら・たかし)

安政3(1856)～大正10(1921) 盛岡南部藩出身。新聞記者を経て外務省に入り、通商局長、次官。大阪毎日新聞社長となり、明治33年政友会創立に参加、幹事長を務めた。35年衆院議員に当選。通相を経て39年西園寺内閣内相。大正2年政友会総裁に就任。7年寺内内閣が米騒動で倒れると、最初の純政党内閣を組織し、「平民宰相」と世論の支持を受けたが東京駅で暗殺される。著に「原敬日記」

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。明治6年陸軍卿となり軍政を確立、徴兵令を制定。11年初代参謀本部長。内相を経て22年首相。枢密院議長に就任し、日清戦争で第1軍軍司令官。31年第2次内閣を組織し、「軍部大臣現役武官制」を実施。日露戦争では参謀総長。元老、長州閥総帥、陸軍の大御所として政界、陸軍に君臨した

丸山 幹治(まるやま・かんじ)

明治13(1880)～昭和30(1955) 長野県生まれ。新聞日本、京城日報を経て大阪朝日新聞に入社したが、大正7年米騒動の際の筆禍事件で退社。昭和3年大阪毎日に入り、28年まで短評欄「硯滴」を執筆。東大名誉教授丸山真男(平城8年法)は次男

●「桂園時代」の重荷、戦後財政の厳しさ

▽外債の発行額は 12億8千万円

▽陸軍は 戦争中の動員で 臨時に4個師団

戦争が終わっても ロシアに備え 常設師団に
金がないから また 公債を発行 17億円を突破

▽利子の支払いだけでも 年間1億円を超すように

▽戦争中の 非常特別税(地盤200%)は

戦争が終わったら 翌年限りで廃止する約束
結局はホゴにし恒久税 重税が庶民の肩に

▽そこへ 陸海軍の 軍備拡張競争

●「硬直財政」—第2次西園寺内閣(44年8月)の財政状況

▽年間5、6億円の国家予算で

3分の1が軍事費 3分の1が公債償還・利子に

▽「健全財政」を 看板にしたが

西園寺は 組閣の段階から 難問にぶつかった

▽斎藤実海軍大臣が 留任に条件

前年 一部しか認められなかった

「海軍充実計画」の承認

▽「軍部大臣現役武官制」の爆弾を

最初に 使おうとしたのは 海軍だった

▽海軍は 弩級戦艦・超弩級戦艦の 激震に襲われ

「八八艦隊計画」の 大幅な手直しを 迫られた

▽第2次桂内閣の 44年度予算案に

総額4億円を超す 海軍拡張案を出した

▽陸軍も 韓国併合で 朝鮮警備に2個師団増設要求

▽陸軍の大御所・山県は 桂首相に 親書を送り

「国家の存立ハ財政の難易ヲ以テ論ズル能ハズ」

増師の必要性を 強調していたが

桂は 海軍にだけ 8千万円の予算を認めた

(この時 建造を認められたのが 戦艦扶桑 巡洋戦艦金剛 比叟 榛名 霧島の5隻)

▽桂が 身内の陸軍の要求を 蹴ったのは

陸海軍同時の軍拡は 認められない財政事情

▽陸軍が 盛んに口にする ロシアの脅威は

日露協約(40年7月 43年7月)が 結ばれていた

▽世論の風向きも 陸軍には冷たく 海軍には暖か

「時代に取り残されないためには

弩級戦艦は必要だ」国民的な理解があった

▽そこへ 戦艦16隻で「世界一周大航海」という

アメリカ海軍の 大デモンストレーション

「桂園時代」

日露戦争が終わった翌年、明治39年1月西園寺が桂から政権を譲り受け、41年7月に第2次桂内閣、44年8月には第2次西園寺内閣と、大正政変までの7年間は、二人の間で政権がキャッチ・ボールされたので、二人の名前をとり「桂園時代」と呼ぶ。

— 帝国国防方針(40年4月) —

陸軍は平時25個師団、戦時50個師団が必要だとして19個師団まで増やした。残り6個師団のうち、2個師団の早期増設を期していた。

海軍は戦艦8隻、巡洋戦艦8隻の「八八艦隊」整備を目指した。

斎藤 実(さとう・まこと)

安政5(1858)～昭和11(1936) 岩手県出身。海軍大将。明治31年大佐で海軍次官となり39年海相。大正3年まで在任。8年朝鮮総督。昭和4年再び朝鮮総督。7年首相。10年内大臣。二・二六事件で暗殺

..... 弩級戦艦

英国海軍は明治39年12月、日本海海戦の教訓を生かして、12吋砲10門、速力22ノットの高速戦艦を建造、「ドレッドノート」と命名した。戦艦三笠はおろか最新鋭戦艦の薩摩、安芸、鞍馬も、12吋砲4門、18ノットでは、一夜で旧式戦艦に。列強海軍は、その頭文字をとり「弩級戦艦を造れ」と大艦巨砲時代に突入した。

しかも弩級戦艦河内、摂津の建造にかかったところへ13.5吋砲搭載のライオンが登場。日本も超弩級戦艦、やがて16吋砲の長門、陸奥、18吋砲の大和、武蔵を建造することになる。

●桂が海軍予算を認めたことが、政権を再び西園寺へ

▽桂首相は 44年度予算編成方針として

- ・一般会計では 公債財源の予算は立てない
- ・5千万円以上の公債償還計画を 堅持する

▽海軍に 予算をつければ

議会第一党 政友会の要求している事業

鉄道 通信網の予算を 削らなくてはならない

▽予算案成立には 政友会(204議)の協力が必要

▽「一視同仁」から「情意投合」へ

桂は44年1月 政友会代議士を 精養軒に招待

「情意投合し、協同一致して憲政の美果を

取めたい」協力の見返りに 政権交代を約束

●「桂園時代」の立役者は原敬

▽日露戦争後の第1次西園寺内閣も 原の剛腕

▽大正7年 首相となり 初の「純政党内閣」

▽爵位を持たない者が 初めて首相

「平民宰相」と 世論の支持を受けた

— 原の反骨精神 —

南部藩家老の家に生まれたが、南部藩は戊辰戦争で仙台藩と奥羽列藩同盟を結んで官軍に対抗したから、維新後の生活は大変だった。明治4年、15歳の時20余室もあった屋敷のうち母屋だけ残して売り払い、上京したが、その金も半年でなくなった。資産家に嫁いでいた叔母の援助を原は断った。同年配の従兄弟がいて、一生頭が上がらなくなるのが嫌だったのだ。

藩の英学塾を退学すると、麴町一番町のカトリック神学校に入った。食費は教会支給で、食べることに困らなかったからだが、洗礼名「ダビデ」というクリスチャンになっている。明治7年、フランス語を教えて貰うという条件で新潟の仏人宣教師の学僕になり、ここで覚えたフランス語が原に外交官の道を開く。

官費の司法省法学校(東法學部の前身)に入ったが、予科3年の時、「賄征伐事件」で校長排斥運動を起こして退学処分を受け、新聞記者に。

— 原の生涯にわたり面倒を見たのは井上馨 —

井上は「天性才を愛し惚れ込んでよく人を

..... 米艦隊の世界周航

米大統領セオドア・ルーズベルトは国民の海軍熱を煽り、世界一の大海軍を作るため戦艦16隻による世界一周航海を計画した。船体を白く塗ったので、「ホワイト・フリート」と呼ばれた艦隊は明治40年12月大西洋岸を出航、南米南端からハワイ、オーストラリア、フィリピンを経て41年10月8日、横浜港に入港した。

この人は「もの柔らかかに話し大きな棍棒を持って行け。そうすれば、遠くまで行ける。このアフリカの格言を、私はいつも大切にしている」—「棍棒外交」と言われた積極外交論者。満州や移民問題で日米摩擦が起きている時、明らかな棍棒外交だったが、日本は朝野をあげて歓迎した。東京、横浜の至る所に日米両国旗が飾られ、新橋駅頭では1400人の小学生が米国歌を歌って、米海軍将兵を迎えた。

ルーズベルトは「私の世界平和に対する最大の貢献は、世界一周大航海だった」と自画自賛したが、日本国民の間にも「米国に負けない海軍を」の国民感情が生まれていった。

ルーズベルト(Theodore Roosevelt)

1858~1919 オランダ系名門の出。共和党選出の副大統領在任中、明治34年、マッキンレー大統領の暗殺で第26代大統領に就任。パナマ運河敷設権獲得、日露講和会議調停。39年ノーベル平和賞

井上 馨(いのうえ・かおる)

天保6(1835)~大正4(1915) 長州藩出身。文久3年伊藤博文と渡英。維新後、大蔵大輔。明治11年参議。18年伊藤内閣外相となり条約改正交渉する。農商務相、内相、蔵相を歴任し、財界に重きをなす

用いた」と言われたが、明治15年大東日報の記者をしていた原を外務省御用掛にスカウトしたのは、外務卿の井上。22年パリ公使館書記官から農商務省参事官になったのも大臣井上のはからい。浪人するたびに、大阪毎日新聞社長や北浜銀行頭取に推薦したのも井上だった。

●原が終生、尊敬していたのは陸奥宗光

▽難しい問題にぶつかるたびに

「陸奥ならどうしたろうか」と考え 行動した

— 原の俳句の号は「一山」 —

戊辰戦争で敗れた東北は薩長から「白河以北一山百文」— 白河(鶴県)から北は一山いくらで買える見切り品だ、と馬鹿にされた。原はその屈辱を忘れまい、いつかは見返してやると、この号に怒りをこめた。仙台の「河北新報」も、白河以北の屈辱からつけられた社名だった。

●原は藩閥打倒の道を、政友会に選んだ

▽藩閥と公然と対立するのではなく

時には妥協し 時には手を組む

一步一步 政党内閣への道を 開いていく

▽一貫している政治姿勢は 現実主義

— 「我田引鉄」 —

「情意投合」による桂内閣との提携も「憲政の一進歩を促すもの」と評価している。藩閥や官僚勢力について、「今日俄に之を打破一掃するが如き事は行はるべきものに非らざる」と、当時の政治状況の中での選択だと考えている。

政友会を極力与党の地位に置いて、国家予算を有利に利用する。鉄道を敷き、道路や学校を作って、その地方に政友会の地盤を築いていった。「我田引水」をもじり、「我田引鉄」の言葉が生まれたほどだった。

▽原内相は 軍拡より 内政優先だったが

西園寺首相は 海軍の要求に 理解を示した

▽薩摩閥・山本権兵衛を味方にして 長州閥に対抗

..... 髭のない首相

原は28歳で天津領事になった時、華族女学校で13歳年下の女生徒を見初めて結婚した。美人だったが、ヒステリーでとにかく髭が大嫌い。

阿部真之助は「手のつけようのない我儘者だった。役所から帰ると、奥さんをなだめるため赤ん坊のようにおんぶして庭をうろうろしている原がよく見られた。私たちが、原の所へ理論を持ち込んで、容赦なく叩き伏せられたのは、彼の現実主義の無理屈によるものだった。ところがヒステリーは、現実主義以上に無理屈だった。最上級の無理屈には、原といえども降参せざるを得ない」

阿部 真之助(あべ・しのぶ)

明治17(1884)～昭和39(1964)群馬県生まれ。毎日新聞に入社、社会・経済・学芸部長を歴任。昭和13年取締役。退職後は人物評論を得意とする毒舌で知られ、30年菊池寛賞受賞。35年NHK会長

陸

奥 宗光(おく・むねみつ)

弘化1(1844)～明治32(1899) 紀州藩出身。明治21年駐米公使。25年伊藤内閣外相となり、27年日英改正通商条約調印、条約改正を実現。著に「蹇蹇(けんけん)録」

山本 権兵衛(やまもと・ごんべい)

嘉永5(1852)～昭和8(1933) 薩摩藩出身。海軍大将。明治26年大佐で海軍省主事となり、海軍改革に手腕を発揮。31年海相。ロシアに備え「六六艦隊」を整備、39年まで在任。大正2年桂内閣総辞職を受けて首相に就任。12年再度首相

..... 「桂園時代」は金が問題だった

緊縮財政の中で、無理を承知で陸海軍と政友会が三つ巴になって、「予算を寄越せ」と言ってくる。この難問を

●山本達雄蔵相は、45年度予算編成で厳しい緊縮方針

▽公債は一切発行しない 新規事業も凍結

▽海軍だけは 凍結から外され

9千万円(艦3隻)が 5年継続事業として

▽陸軍は 2個師団増設要求が またも 1年先送り

海軍が 予算で優位に立てば

「海主陸従」になってしまうとの 危機感

▽45年4月 石本新六陸相が急死

後任は 意外にも 薩摩閥の上原勇作中将

▽西園寺は 薩摩から15年ぶりの陸相に 期待感

原も日記に「異分子の如き上原を

挙げなば或は陸軍の改革もなさんか」

●上原起用は、この押しの強い古参の中將で「何が何でも増師実現」という、陸軍の決戦体制だった

▽操縦役は 田中義一少將(驍騎)

山県に 陸相就任を求められた上原は

「濫りに陸軍縮小を叫ぶ政党連中の矢面に立つ」

▽上原は 元号が 大正と改まったばかりの8月9日

6年計画3千万円余りの 増師要求を提示した

①朝鮮には交代で1個師団半派遣しているが、費用

がかさみ訓練も行き届かない②ロシアに備える

ためにも、2個師団増設し朝鮮に常駐させたい

③交代費用260万円が不要に ④行政整理で捻出

の270万円も充てる⑤軍服の耐用年数延長、兵器

費用も節約 — 大正2年度予算で認めてほしい

●西園寺首相には、認める気はなかった

▽政友会は 総選挙(5月15日)で 圧倒的勝利

衆議院(381議席)で209議席 過半数を制したのは

「国民が公約(緊縮、行政整理)を支持したからだ」

▽山県を訪ね 増師要求の撤回を 求めた

▽閣内でも 反対論が 続出した

各省とも 予算の8~15% 大幅な経費節減

陸軍は 8千万円の大予算で たった3.3%

▽それも 一般会計に戻さず 軍拡に充てるのでは

財政再建に 全く 役立たない

▽山本蔵相が「ない袖は振れない」

上原は「事、国防に関する以上、

ない袖も振るべきだ」

それこそ魔法使いの手品のように解決したのは3年後(翌3年)の第1次世界大戦だった。ヨーロッパの戦場から遙かに遠い日本は空前の軍需景気に沸いた。あっという間に、莫大な借金を返しただけでなく債務国が一躍債権国になったが、それは3年後の話で、とにかく先立つのは金だった。

山本 達雄(やまもと・たつお)

安政3(1856)~昭和22(1947) 大分県生まれ。明治31年日銀総裁。44年日本勧業銀行総裁から第2次西園寺内閣蔵相。その後、山本、原内閣蔵相、斎藤内閣内相

石本 新六(いしもと・しんろく)

安政1(1854)~明治45(1912) 兵庫県出身。陸軍中將。明治36年陸軍次官となり44年西園寺内閣陸相。長男の最初の結婚相手が加藤シズエ(明治30~平成13)

上原 勇作(うえはら・ゆうさく)

安政3(1856)~昭和8(1933) 宮崎県都城生まれ。陸軍大將・元帥。明治14年フランスに留学、工兵技術を導入。日露戦争で岳父野津道貫第4軍司令官の参謀長。旭川、宇都宮師団長を経て45年4月西園寺内閣陸相。増師を要求して単独辞職、大正政変の因を作る。教育總監、参謀総長を歴任。山県没後の陸軍の重鎮に

田中 義一(たか・ぎいち)

元治1(1864)~昭和4(1929) 長州藩出身。陸軍大將。4年間ロシアに留学、日露戦争で満州軍参謀。明治44年軍務局長。大正4年参謀次長となり、シベリア出兵を強行。7年原内閣陸相。14年政界に転じて政友会総裁に就任。昭和2年首相。山東出兵を行い張作霖爆殺事件で天皇から叱責され辞職

●新聞も一斉に陸軍批判

▽大阪朝日「今陸軍当局の要求如何に強大なりと雖も、国民が政府に対する言責履行の要求は、更に強大なる事を忘るべからず」

▽時事新報は「軍備は消防の如し」と論評した

●陸軍首脳は「内閣を倒しても要求を通す」

▽10月 大正2年度予算編成を控え「事態対処案」

「国防上ニ関スル明治39年以來ノ経過ヲ説示シテ、海軍ヲ拡張シ、陸軍ノ経費ヲ削減シテ兵力ヲ縮小スルハ果シテ我国防ノ方針ニ適合スルヤヲ論弁ス」海軍に比べ 不公平だと訴え

反対された場合は 陸相辞職で総辞職へ

▽田中軍務局長は 朝鮮総督寺内正毅(麒麟将)に

「国家由々しき大事の時、ご決心

切に願ひ上げ候」と電報を打った

▽自分たちが 西園寺内閣を倒すから

その後の組閣を 引き受けてくれ

●西園寺首相も、陸軍と全面对決を決意

▽11月10日 山県を訪ねて 最後通告

「師団増設案は切る積もりである」

▽大正2年度予算には 海軍拡張費1千万円

山県が「その一部を陸軍に回したらどうか」

妥協案を出したが 西園寺は拒否した

▽政友会各支部の 増師反対決議が 相次いだ

東京商業会議所も 12月4日 増師反対声明

各地の商業会議所も これに ならった

▽東京経済雑誌は 「西園寺内閣は、陸相の提議にし

て其非なるを認むれば、之を峻拒すべし。之が為めに百の陸相を更迭せしむるも可なり」

●山県には、頭の痛い事態だった

▽上原陸相に 自重を促す手紙を出し

最後に考えた秘策が 詔勅だった

▽上原に 辞表を出させ

天皇から 西園寺首相に

「陸軍とよく協議するよう」詔勅

▽西園寺内閣は 存続させ 天皇の威光で

西園寺の譲歩を 引き出そうとしたのだ

— 時事新報(11月26日) —

「消防隊によりて近火を鎮められたるその功勞に対しては、その近隣の居住者いずれも涙を流して謝意を表すべし。しかれども、一たびその消防隊が鎮火後に至り、火災の難を免れたる近隣の居住者に対し、汝等の生命、家財は予等の尽力によりて救済を得たるものなれば、その財産を消防隊に提供せよと強請せられたる場合ありとせば、その近隣の居住者は消防隊に対して果して謝意と敬意を表すべきか。今日の陸軍側の態度は、まさにこの消防隊と云うべく、大いに自ら顧みるの必要あるべし」

寺内 正毅(てらうち・まさたけ)

嘉永5(1852)～大正8(1919) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。教育総監、陸大校長を経て明治35年陸相。43年朝鮮総督。大正5年首相に就任、シベリア出兵を強行して、米騒動で総辞職に追い込まれる。長男寿一(前輔政令館)も親子2代の元帥

— 民衆の政治意識は高まっていた —

第1回総選挙(明治23年)の有権者は、直接国税15円以上を納めた者だから45万人で、人口4千万人の1%余り。ほとんどが地主など富裕階級。それが32年、10円以上に下げられ、日露戦争中の増税で10円以上の納税者がぐんと増えた。41年の総選挙では有権者158万人。

— 山県の上原陸相宛手紙 —

「仮令蹴り飛サレテモ、又瓦解シテモ、事ハ其儘落着スベキニアラズ。必陸軍対国民、藩閥対国民、官僚対国民ノ好辞柄ヲ藉リテ捲土重来可致ハ必然之儀ト存申候」(11月17日)

- 西園寺首相は11月30日、増師要求拒否を閣議決定
 - ▽臨時閣議で 陸相に勧告して 辞表を出させる
 - 陸軍が後任を送らない場合は 内閣総辞職する
 - ▽12月1日 辞表を求められた上原は
 - 「後で届ける」と言っ 官邸を出たが
 - 翌朝 青山離宮に参内し 天皇に直接辞表
 - ▽「帷幄(ゐあく)上奏権」が
 - 軍政機関の長・陸軍大臣にもあるとの 拡大解釈
 - ▽大臣の辞表は 首相に提出するのが 決まり
 - しかも 大臣辞職は
 - 軍機・軍令事項ではないから 全くの違法

- 山県の筋書きは、最後の段階で狂った
 - ▽大正天皇は「上原がこんなものを 持ってきたよ」と 辞表を 桂(内相)に渡された
 - ▽桂が 天皇に こうなった経過を 説明し
 - 山県が 予め用意して
 - 桂に渡してあった詔勅が 出るはずだった
 - ▽肝心要の桂が 山県の指示通りに 動かず
 - 辞表を 西園寺首相に返し 詔勅は出なかった
 - ▽西園寺内閣は 12月5日 総辞職
 - 「大正政変」の幕が 切って落とされた

- 「月が出た出た」と、桂を月にたとえ、痛烈に批判した 添田唾蟬坊
 - ▽「炭坑節」は もともとは
 - 「大正政変」に流行った演歌
 - ▽全国に 広がると共に
 - 新聞 政党の 煙突から
 - 猛烈な「桂批判」の煙が
 - 噴き出していった

位人臣を極めた桂

総理大臣3度、陸軍大将、最高位の公爵。陸相、台湾総督を歴任し、直前には内大臣兼侍従長、元老に。長州閥にも恵まれたし、人の操縦術にも巧みだった。誰彼構わずニコニコ、ポンと肩を叩くので、「ニコポン宰相」とか「軍服を着た太鼓もち」と言われた。日露戦争中に新橋の名妓お鯉を身請けして、新聞の批判を浴びた。

東京朝日新聞は「新人名字彙」(昭和41年11月29日)

帷幄上奏権

帷とは垂れ幕、幄は引き幕のことで幕を張り巡らした総大将の本営 ーつまり、天皇を意味した。明治憲法下では、統帥機関の参謀総長、海軍軍令部長は、軍機・軍令事項に関して閣議を経ずに直接天皇に上奏出来た。

「原敬日記」(12月3日)

西園寺は山県を訪ね、陸相後任について質したが、「山県は夫れは直ちに引受くる者なかるべし、後任者云々と云はるゝよりも何か時局を処理せられては如何と云へり。即ち体よく謝絶せしなり」

演歌

明治・大正期の庶民の声を示すのが演歌。明治20年頃から、自由民権運動の壮士が街頭で歌ったもので、文字通り演説代わりの歌だった。民衆もその中に、鬱積していた政治・社会への批判を思いっきり吐き出した。

添田唾蟬坊の演歌

月が出た出た 月が出た	炭坑節(筑豊炭田で歌われた炭坑唄)	月が出た出た 月が出た
セメント会社の 上に出た		三池炭鉱の 上に出た
東京にゃ煙突が 多いから		あまり煙突が 高いので
さぞやお月さま 煙たかろう		さぞやお月さん けむたかろ

添田 唾蟬坊(そえだ・あぜんぼう)

明治5(1872)～昭和19(1944) 神奈川県生まれ。本名平吉。横須賀で人夫をしている時、壮士の街頭歌に感動、演歌師としてバイオリンで面白い節づけをしながら、社会改良を訴えた。「ラッパ節」や「あゝノンキだね」の「ノンキ節」など、時事・社会風刺の歌で一世を風靡した

に「内閣総理大臣なり。大臣の上に冠るが故にカツラというなり。元はサムライなりしも、シヤクを貰ってからは公卿様となれり。長州の山県系の駿足にして、天下の料理よりもお鯉り料理が巧いという事なり」

▽伊藤博文は「俺が八方美人なら桂は十六方美人」

●大変な政治手腕の持ち主だったのでは…

▽第1次内閣の時(明治34年)「緞帳内閣」「二流内閣」

明治国家最大の危機 日露戦争を乗り切り

4年7か月と 戦前では 一番の長期政権に

● 陸軍の出世街道を約束したドイツ留学 ………

明治3年、23歳の時、最初はフランスへ行く予定だった。陸軍が仏式を採用し、桂も横浜でフランス語を習っていた。ロンドンに着くと、普仏戦争の真っ最中。フランスは連戦連敗、パリも包囲された。そこで勝っているプロシア、ベルリンに留学先を変えたのだが、感覚の良さ、決断の早さだった。

6年に帰国すると陸軍卿山県に軍政改革の意見書を提出、翌年大尉に抜擢されたが、山県は目を細めるようにして可愛がったという。8年にはドイツ公使館付武官となり、陸軍を仏式からドイツ式に切り替える先導役を務めた。

▽第2次内閣(明治41年)では

山県の意向を無視し 独自の政策を進める

▽「桂園時代」からして 元老排除の第一歩だった

山県たち元老には 段取りを決めた後

事後承諾を 求めただけだった

●天皇崩御で帰国した桂は、内大臣兼侍従長に

▽浜松まで出迎えた 寺内正毅(辯論)が

山県の意向を伝えると 桂は 東京までの車中
ずっと 浮かない顔だったという

▽政治に 満々たる抱負を 持っていたのに

雲の上の宮中に 祭り上げられてしまった

▽新聞は「長州閥が新しい天皇になったのを

機会に宮中も握ろうとしたのだ」

伊藤 博文(いとう・ひろbumi)

天保12(1841)～明治42(1909)長州藩出身、尊皇攘夷運動に参加し、参議内務卿となり内閣制度、憲法制定、枢密院設置など、国家体制を整備した。明治18年初代首相に就任し4次の内閣を組織。枢密院議長3度。33年立憲政友会を創設し総裁。38年韓国統監。ハルビンで暗殺

普仏戦争

ドイツ統一を目指すプロシアと、それを恐れるフランスのナポレオン三世が対立し、1870年戦争になった。プロシアが大勝し、翌年アルザス・ロレーヌを獲得、ドイツ帝国が成立した。

桂は新しい政治を目指していた

明治45年7月、外遊する時、明治天皇に「元老たちもだんだん年をとってきます。これからは、国民みんなで陛下をお助けしなければならない」

与党になる政党を持つこと、新党構想を抱いて英国の議会政治を見て来ようとしたが、途中で天皇が崩御、桂の計画は狂った。

徳富 蘇峰(とくとみ・そほう)

文久3(1863)～昭和32(1957) 熊本県生まれ。本名猪一郎。明治23年国民新聞を創刊。平民主義を唱えたが、日清戦争後から国家主義に。昭和18年文化勲章。戦後公職追放。著に大正7年から生涯をかけた「近世日本国民史」全50巻

「蘇峰自伝」から

桂公は日英同盟では伯爵となり、日露戦役で侯爵となり、而して朝鮮併合で又た最上の公爵となった。この公爵となったことは、桂公自ら欲したのであった乎、將た他より持上げられたのであった乎、予は桂公に向って「御身の公

▽原も「山県一派の陰謀にて枢府並に宮中を一切彼等の手に収めんと企に出たること明かなり」

▽しかし 徳富蘇峰は

「桂の政治的野心が元老によって警戒され、とくに山県の嫉視を受けることになった」

●桂に、4か月も経たないうちに政権復帰のチャンス

▽山県の指示に従って 詔勅を出せば

西園寺は 勅命に従うしかない

▽西園寺が 陸軍に譲れば 桂の目がなくなる

▽桂は 西園寺内閣が倒れば

政権は 必ず 自分の所に回ってくると

●元老会議が12月6日、11年ぶりに召集された

▽後継首相の選考は 難航した

▽まず 西園寺に留任勧告したが 西園寺は

「陸軍の譲歩がない限り、留任は不可能だ」

▽候補に上がった 元老の松方正義

海軍の山本 陸軍の寺内も 次々と消えた

▽乏しい財政で 陸海軍同時の軍拡は 不可能

どちらかが 譲らない限り 新内閣は作れない

▽14日 第9回会議で 万策尽きた山県が

「自分か桂が出て事態を收拾するしかない」

▽元老会議は 山県の74歳を考慮 65歳の桂を推挙

●桂は「雲の上からの復活」に、まず元老の口を封じた

▽17日 組閣の大命を受けると

山県を 椿山荘に訪ねて

「政治問題に関しては、不肖私が職を奉ずる以上、今後決して貴方のご指示を煩わさぬ積もりです。どうか、ここでご静養下さい」

▽さらに つべこべ言わせないために 詔勅

●天皇の威光を笠に着たやり方が、桂の命取りに

▽「宮中・府中の混同」

宮中に入った者が 政治に介入する

しかも お手盛りで 詔勅を出して貰う

▽尾崎行雄は「これでは立憲政治の土台が台無しに

なってしまふ。憲法を守れと、護憲運動を起こした精神は、ここにあった」

爵は、寔に高価である」と云った。それは実にその通りであった。凡そ桂公の一生の中に払ふた代価の中で、この公爵ほど高価のものは無ったであらう。世間も亦た決してそれが為に桂公に対して、同情を加へなかつた。しかのみならず、それよりも甚だしきは、桂公の擁護者たるべき諸元老の、桂公に対する好感を滅殺したることだ。

桂公よりも大先輩である、井上侯(馨)が、一格下って侯爵である。松方侯(正義)が亦た同様である。山県公などは、桂公に対して自ら親分と思ふてゐたのが、全く桂公と同輩となったわけである。

松方 正義(まつかた・まさよし)

天保6(1835)～大正13(1924) 薩摩藩出身。明治8年大蔵大輔、11年大蔵卿。日本銀行条令、兌換銀行条令を制定。18年蔵相。24年首相兼蔵相となるが、選挙干渉で辞職。29年第2次内閣で金本位制を実施。赤十字社長、内大臣を歴任

桂に対する詔勅

「朕登極ノ初二当り卿ガ多年ノ忠亮ヲ倚信シ常侍輔弼ノ任ニ膺(あ)ラシム然ルニ今ヤ時局ニ鑑ミ更ニ卿ヲシテ輔国ノ重任ニ就カシメンコトヲ惟フ卿克ク朕ガ意ヲ体シ契順匡救(きやうきゆう)ノ誠ヲ尽クセヨ」

尾崎 行雄(おざき・ゆきお)

安政5(1858)～昭和29(1954) 神奈川県生まれ。第1回総選挙(明治23年)以来、連続当選25回。文相、法相、東京市長を歴任。大正2年の護憲運動で先頭に立ち「憲政の神様」と称される。昭和27年代議士生活63年の記録を樹立、国会から「名誉議員」の称号を贈られ、没後憲政の功績を讃えた「尾崎記念館」が建てられた

▽政党 新聞の十字砲火が 攻撃目標を
桂一点に絞って 集中することになった

●護憲運動は「交詢社のストーブ談議から始まった」

▽12月12日 福沢桃介らが ストーブを囲んで
「けしからん。これが黙っていられるか」

▽新聞記者もいて「世論を喚起するのは
君たち新聞だ。大いに歩調を揃えて戦おう」

▽13日「憲政作振会」が組織され 決議した
一、国政に対する元老の干渉を絶対に排除す
二、政友・国民両党の堅実なる分子を基礎とし、
純民党の成立を期す

三、刻下の情勢に伴はざる師団の増設に反対す
▽14日には 築地の精養軒で「時局問題懇親会」

尾崎(政友) 犬養毅(憲政) 朝吹英二(三井)ら28人
▽福沢が「明治維新は、尊皇攘夷のお題目で全国の
志士の血を沸かせた。今度もそういうスローガ
ンがいる」「憲政擁護」と「排閥興民」の2案

▽衆議一決「憲政擁護」で行こうとなった時
古島一雄が「待った」をかけた

「4字では語気が弱い。これを憲政擁護・
閥族打破と8文字にすれば、強く響く」

▽こうして決まった「憲政擁護・閥族打破」が
全国にこだまし 民衆を巻き込んでいった

●雨の降りしきる19日、「憲政擁護国民大会」(歌舞座)

▽午後1時開会に 3時間も前から聴衆が
入場料30銭 寿司折に2合の酒壺

▽場内は3500人で超満員 場外は「入れろ、入れろ」
紳士もいれば学生 法被姿の車夫 露天商もいた
▽まず「閥族の横暴跋扈、今や其極に達し、憲政の危
機、目睫に迫る。吾人は断固妥協を排して閥族政
治を根絶し、以て憲政を擁護せんことを期す。右
議決す」宣言書が 満場の拍手で 可決された

▽尾崎が ほとぼしるような口調で

「諸君、国民は彼らに対して一大決戦なさざるべ
からず。しかし、我々の戦闘準備は弾丸ではな
い、鉄拳でもない、道理と正義の利剣である。正
義の向かうところ天下に敵なし。この利剣を振
るがて、大いに閥族を殲滅しようではないか」

交詢社(こうじゆんしゃ)

慶応義塾、時事新報を創設した福沢
諭吉が、明治13年、慶応卒業生のため
に創立した社交クラブ。実業家、代議
士、新聞記者など、三田OBが出入り
して「交詢雑誌」を発行した。

福沢 桃介(ふくざわ・ももすけ)

明治1(1868)～昭和13(1938) 埼玉県生
まれ。慶応に学び福沢諭吉の養子に。木
曾川八百津発電所、矢作水力、大阪送電
などを設立。明治45年、千葉県から政友
会公認で衆院議員に当選。大正9年大同
電力を設立し社長

犬養 毅(いぬかい・つよし)

安政2(1855)～昭和7(1932) 岡山県生ま
れ。第1回総選挙以来、連続当選18回。明
治31年大隈内閣文相。国民党総理、革新
倶楽部リーダーとして、護憲・普選運動
を推進、「憲政の神様」と称された。大正
14年政友会・革新倶楽部合同後、政界引
退を表明したが、昭和4年政友会総裁に
選ばれた。6年首相となり満州事変後の
政局に対処したが、五・一五事件で暗殺

朝吹 英二(あさぶき・えいじ)

嘉永2(1849)～大正7(1918) 埼玉県生ま
れ。明治3年福沢諭吉暗殺を企てて失敗
し、そのまま慶応義塾の玄関番に。三井
系の鐘紡専務、王子製紙会長を歴任

古島 一雄(こじま・かずお)

慶応1(1865)～昭和27(1952) 兵庫県生
まれ。新聞日本、万朝報記者を経て明治
44年衆院議員(当選6回)。犬養毅の懐刀
として国民党、革新倶楽部で活躍。戦後
自由党総裁鳩山一郎の公職追放で後任
に推されたが、吉田茂を推薦、以来吉田
の指南番に。著に「老政治家の回想」

▽犬養は 前かがみに 顎の山羊髭をしゃくって
「彼らか今日まで寿命を続けたのは、畢竟これを
破る者がなかったためである。政党ありたりと
いえども、いわば形だけあって藩閥打倒の精神
なく、わずかに蝸牛角上の争いに終始して個々
分立しておったがため、藩閥がかくも力を得た
のである。これ畢竟するところ我々政党が意気
地がなかったためである。今日以後、妥協は一
切これを封じるのであります」

▽一杯機嫌も手伝って 割れんばかりの 大歓声
▽「大正維新」「大正新政」変革への期待もあつた
減税要求もあつたし 元老支配への不満
「陸軍横暴、長州横暴」の 怒りもあつた
▽雑多な声が「桂内閣打倒」の一点で 纏つた

●桂は組閣に当たり、「陸海軍相打ち」を考えた

▽陸軍の増師だけでなく
海軍の補充計画も 1年間 延期しようとした
▽海軍が 態度を硬化させ 齋藤海相は 留任拒否
▽そこで また 齋藤留任に詔勅
▽桂は12月21日 組閣を終えた
▽最大の難問 陸海軍軍拡を「1年凍結」で解決し
政局運営に 満々たる自信を 持っていた
▽帝国議会は すぐ 年末年始の休暇に入ったが
相次ぐ詔勅作戦が「桂内閣打倒」の油に火
▽大阪毎日新聞社長 本山彦一が
逋信大臣後藤新平に 手紙で警告したように
「政治の季節」が 訪れつつあつた

●年が明け大正2年に入ると、護憲運動は政党の枠を越えて国民運動としての広がり

▽新聞は連日 各地各団体の 時局講演会を報道
「記者大会開くべし、大演説会開くべし」
▽1月21日 再開された議会は またしても
詔勅で 2月4日まで 15日間の停会

停会

現在の憲法にはない制度で、明治憲法下では
天皇の命により、衆議院、貴族院の機能を一時
的に停止することが出来た。

政友会と国民党は犬猿の仲

尾崎も最初は、半信半疑だったとい
う。「いつも知らない所で妥協が成立
してバカを見る。自分は臆病だから、
今度も人の後からついて行く積もり
だった。ところが、政友会も国民党も
一緒になって、真剣に議論している。
これは本物だと思って、勇気を出し
て突進する気になった」

齋藤海相への詔勅

「朕惟フニ卿久シク海軍軍政ノ局ニ
膺(あ)レリ、方今機務多端タリ、卿ニ
須(ま)ツコト殊ニ多シ、宜シク疾ヲカ
メテ懇々ノ節ヲ効(あ)スヘシ」

本山 彦一(もとやま・ひいち)

嘉永6(1853)～昭和7(1932)熊本県生ま
れ。大阪新報、時事新報を経て明治36年
大阪毎日社長。44年東京日日を合併、毎
日新聞の基礎を築いた

後藤 新平(ごとう・しんぺい)

安政4(1857)～昭和4(1929)岩手県生ま
れ。内務省衛生局長、台湾総督府民政長
官を経て明治39年満鉄総裁。第2次・第3
次桂内閣逋相。寺内内閣内相、外相を歴
任し大正9年東京市長。12年山本内閣内
相となり、震災後の帝都復興計画立案

…… 本山の後藤宛手紙(12月24日) ……………

有識者有志は勿論、男女学生より素町
人百姓馬丁車夫に至るまで、湯屋髪結
床にて噂の種となり、元老会議の不始
末に対しては、裏店井戸端会議に上り、
炊婦こまつかひまでが窃かに罵り合候
やうの次第にて、近来珍らしき政治思
想の普及変化を実現いたし、万一新聞
紙が教唆の態度に出たりしならば、焼
打事件の再燃ありたらんとも知れずと
相考候位に御座候」

- 桂は、「政界再編成」の波を起こそうとしていた
 - ▽前日の20日 新聞記者を招いて
念願の 新党結成の計画を 発表
 - ▽万年野党の国民党に
新党のクサビを打ち込めば 脱党者が続出
政友会からも かなりの参加者の 読みだったが
 - ▽2月7日 新党「立憲同志会」に 集まったのは
国民党の脱党者46名 政友会からは1人もなく
桂寄りの 中央倶楽部34名
無所属議員6名と 期待外れに終わった

- 停会明けの2月5日、新聞各紙は「天下分け目の決戦」、
「政府対政友会の決戦」の大見出しを掲げた
 - ▽政友会は その朝の代議士会に
病気の1人を除き 全員が出席 結束の固さ
 - ▽国民党は さらに 脱落者が増え 出席は45名
しかし 半分に引き裂かれて 犬養の下に結束
政友会と 攻守同盟を結んだ
 - ▽原敬も 桂内閣と決戦の覚悟を 決めた
「不信任決議案」の提出 賛成署名者234名
 - ▽桂に残された道は 解散しかなくなった
 - ▽衆議院の門は 早朝から 数千の群衆に囲まれた
桂新党の議員が やって来ると
「通すな」「殴ってしまえ」の 怒号が飛んだ
 - ▽超満員の傍聴人が 見守る中
桂首相の 施政方針演説に続いて
「内閣不信任決議案」が 上程された
 - ▽紋付羽織袴の尾崎が 提案理由説明に 登壇した
 - ▽激しい野次の中 原稿も見ないで 20分間
「御聴きなさい、御聴きなさい」
 - ▽桂が 自らの進退 組閣に際して
2度も詔勅をわずらわし 天皇の権威を借りて
全てを正当化しようとした責任を
手を振り 足を踏みならして 追及した
 - ▽「大正政変」を 象徴する名文句
「玉座を以て胸壁となし、詔勅を以て弾丸に代へ
て」が 桂内閣の死命を 制することになった

- 誰もが「解散だ」と思っていた
 - ▽ところが 議会は再び 10日まで5日間の停会

護憲運動の波は大きなうねりに

1月24日、新富座で「第2回国民大会」が開かれ、入りきれない群衆が2万人も路上にひしめいた。

あっちこっちで街頭演説が始まり、市電は線路を塞がれストップ。尾崎、犬養の演説に、「よう、憲政の神様！」の声が飛んだ。護憲運動の波は全国各地に広がり、2月1日には、風雪の舞う大阪の中ノ島公会堂前で、3万人が「政友会頑張れ」の大合唱をした。

尾崎の弾劾演説

「御聴きなさい、御聴きなさい。すべて天皇は神聖にして侵すべからずと云ふ大義は、國務大臣がその責に任ずるから出て来るのであります。(辯) しかるに桂公爵は内府に入るに当っても、大詔やむを得ざると弁明し、また内府を出でて内閣総理大臣の職を拝するに当っても、聖意やむを得ぬと弁明する。いかにもかくの如くなれば、桂総理大臣は責任なきがごとく思へるけれども、かえって天皇陛下に責任の帰するをいかにせん。(辯) …彼等は常に口を開けば直ちに忠愛を唱へ、恰も忠君愛国は自分の一手専売のごとく唱へてありますが、其為すところを見れば、常に玉座の蔭に隠れて、政敵を狙撃するが如き行動を執って居るのである。(辯) 彼等は玉座を以て胸壁となし、詔勅を以て弾丸に代へて政敵を倒さんとするものではないか」(讞駁から)

尾崎の話

最初は、言葉は出来るだけ穏やかなものにし、理詰めにする。真綿で首を絞めるような演説にする積もりで、原稿も準備していた。ところが、尾崎の前に立った議員の質問を桂が鼻先であしらい、軽蔑的な態度だったた

▽桂首相は その朝 加藤高明外相から
「イギリスではエドワード七世死去の際、保守党
と自由党に呼び掛け、政争の1年間休戦を実現」
▽解散から また 詔勅へと 決心を変えた

●2月9日、西園寺(政友会)に3度目の詔勅「諒闇中の政争
を心配している。紛争を收拾するように」

諒闇(りやうあん)

「まことに暗し」の意味で、天皇が両親の喪に
服する期間。1年と定められ、国民も服喪した。

▽西園寺は「錦旗節刀を賜ったようなもの」
「これに背けば、切腹するしかない」

▽西園寺邸に集まった 政友会幹部の間にも
「仕方がない」といった 無力感

▽ただ1人 尾崎は大反対
ここで 不信任案を撤回すれば
政友会は 護憲運動を 頂点で裏切ること
政党としての信頼を 一遍に 失ってしまう

▽「天皇をお諫めしてでも」と 主張する尾崎に
西園寺は「他人に賜った詔勅なら
お諫め出来るが、自分への詔勅には出来ない」

▽駆け付けた犬養は「議会に問題が起こるたびに
詔勅では、憲政上の大問題だ。たとえ国民党単独
でも、既定方針で突き進む」

▽桂は 臨時閣議を招集すると
閣僚たちに 朗らかな顔つきで
「不信任案は撤回されるだろう」

●国会は、2月10日再開された

▽西園寺は 朝の代議士会で 挨拶し
一時の感情による 軽挙を戒め
「慎重に考えて行動しろ」と 望んだが
「不信任案を撤回しろ」とは 言っていない

▽西園寺は これに先立ち 参内して
政友会総裁の辞任を 上奏していた

▽代議士会の大勢は 戸水寛人の緊急動議
「この際、全速力を以て、
予定の行動をとられんことを希望します!!」
この絶叫が 満場一致の議決となった

め、「せっかく準備した演説を忘れ、
頭越しに食ってかかった」

加藤 高明(かとう・たかあき)

万延1(1860)～大正15(1926) 愛知県生
まれ。三菱の岩崎弥太郎の女婿。明治33
年第4次伊藤内閣外相。35年衆院議員と
なり、第1次西園寺、第3次桂、第2次大隈
各内閣外相を歴任。立憲同志会、憲政会
総裁に就任、大正13年首相。普通選挙法
と治安維持法を成立させる。14年第2次
内閣を組織したが、議会で倒れ死去

西園寺政友会総裁への詔勅

「諒闇中政争紛糾ノ状アルハ朕ノ軫
念ニ堪ヘザル所ナリ。卿ガ辞表退職
ノ際、国家ノ重臣トシテ待遇ノ意ヲ
昭ニセリ。宜シク朕ノ意ヲ体シテ贊
襄スル所アレ」

「原敬日記」

黨員激昂せり、畢竟桂が聖旨を仰ぎ
て議を抑へ又西園寺を毒殺するも
のとして憲政上忍ぶべからざる事と
して黨員大に憤激せしなり。

西園寺の胸のうち

元老として、詔勅に背くことは出来
ないが、憲政の常道を乱すことは、さ
らに忍びない。この二律背反を、自分
の総裁辞任で断ち切ろうとしたので
はないか — 「詔勅の重みは、自分が
一手に引き受けて総裁を辞任した。
代わりに、政友会がどう進むか、その
行動の自由は確保した」

西園寺が口には出せないゴー・サイ
ンだったのではないか。

戸水 寛人(とみず・ひろんど)

文久1(1861)～昭和10(1935) 石川県生
まれ。明治27年東大教授。ローマ法の権

▽全員が 胸に白バラをつけて 国会へ
不信任案に 賛成の白票を投ずる
その決意を示そうと 夜でも目立つよう
三越に 特別注文した 白バラの記事だった

●国会は、午後1時開会の予定だった

▽警視庁は 早朝から 警官650人を配置 厳戒態勢
群衆が 次々押し掛け 国会を包囲していった

▽群衆を押し返そうと 20騎の騎馬警官隊が突進
群衆も 石を投げて応戦 怪我人が出始めた

▽衆議院議長 大岡育造(政友会会長)は
国会内の大臣室に 桂首相を訪ねて

「今この議院の周囲は、激昂した民衆に取り巻か
れているのです。政府がここで解散するという
ことにすれば、この民衆は決して血を見ざれば
止むものではありません。場合によれば、これ
が端緒となって内乱になるかも知らん。だから
切に閣下のご考慮を願う」 辞職を勧告した

— 若槻礼次郎蔵相が回顧録に書いている —

桂は何も言わずに黙って聞いていたが、しば
らくして「よろしい」と言ってポイと席を立っ
た時、心は決まったようだ。桂が閣僚を集めて
総辞職を伝えると、決戦覚悟、解散だと意気込
んでいた閣僚たちは、気が抜けたように、しば
らくは口をきく者もなかったという。

▽桂は 議事を さらに 3日間停会とし
翌11日総辞職 組閣から53日目の崩壊だった

●群衆の怒りが爆発、暴動となった

▽「総辞職のための停会」とは 知らないから
不信任案阻止の 強権発動と 思ったのだ

▽東京日日新聞は「帝都は全く戦場と化せり」

▽軍隊が出動 翌11日午前2時に 鎮圧したが
襲撃された新聞社6(都 野と 鼠 鞠 読 二六)
警察署12 交番76(缺24)

負傷者 群衆51(うち1人死) 警察81 逮捕253

▽騒乱は 大阪にも 飛び火したが
2月20日 山本権兵衛内閣が発足すると
潮が引くように 収まっていった

威として知られた。対露強硬論の7博士
の1人として日露開戦を唱え、講和に際
しては「バイカル湖以東を割譲させよ」
と主張、「バイカル博士」の異名をとる。
講和条約反対の論文を発表して政府か
ら休職処分。「大学独立論」に発展、文部
省が山川健次郎総長(大山巖入の山川松の弟)を
依願免官にすると教授会が総辞職を決
行、戸水を復職させた。退官後は石川県
から政友会公認で衆院議員。当選5回

大岡 育造(おおか・いくぞう)

安政3(1856)～昭和3(1928)山口県生まれ。
明治23年衆院議員(当選12回)。政友
会に参加して総務。大正1年以後衆院議
長3回。3年山本内閣文相

若槻 礼次郎(わかき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949) 松江生まれ。
明治39年大蔵次官。大正1年第3次桂
内閣蔵相。15年首相に就任したが、金融
恐慌で辞職。昭和6年再び首相となるも
満州事変で8か月で辞職。重臣として終
戦に尽力した。著に「古風庵回顧録」

..... 大阪毎日新聞の社会面

紙面を太い黒い罫で2つにぶち切っ
て、真ん中に特大の活字で見出しを2
列に並べた。「憤激せる東京市民／横
暴の警官良民を馬蹄に懸く／大衆雲
霞の如く御用新聞社に押寄す／即死
者と数十名の重軽傷者あり／軍隊終
に出動す」

紙面右側の見出しが「日比谷原頭殺
気満つ／国民公憤の気凝って天を衝
き／衆議院附近の群衆怒濤の如し」

— 桂は8か月後、胃癌で亡くなった —

桂が総辞職したとき山県は「桂は雪
隠で首をくくったようなものだ」と、
冷たく言い放ったという。また「桂は

●第3代政友会総裁になった原敬は、大正7年念願の「政党内閣」を作る

…… 原と山県の関係 ……

原は藩閥を憎み、その頂点にいる山県を憎んだ。「原敬日記」を見ても、「山県非難」で埋まっている。山県もまた大の政党嫌いだった。ところが晩年は、長年の政敵同士が、かなりの信頼関係になっている。原は首相になってから、重要な政治問題、国際問題は、その都度山県を訪ねて相談している。山県の慎重な国際感覚を信頼していたからだ。山県も、原の的確な判断力、鮮やかな政治手腕を買っていた。

▽原は 大正10年11月4日 東京駅で

19歳の大家駅員 中岡良一に 暗殺された

▽病床にあった山県は 涙を流し

「いま原の殺された夢を見ていた。あれは偉い男だった。あのような人物がむざむざ殺されては日本はたまったものではない」

▽原は 常々「いつ殺されるか分からないが、そうした時、決して取り乱さないように」

▽浅夫人は 急報に接した時

「原が言っていたのはこの事だ」と 別室で 気持ちを落ち着かせてから 駆け付けたという

●原は2月20日、遺書を書いていた

▽皇太子(聡暉)の 外遊が決まったばかりで

右翼が「日本の皇太子が外国へ行くのはけしからん」と騒いでいたから 何か虫が知らせたのか

▽私室の手文庫からは 4通の遺書が 発見された

▽1通は 浅夫人と養子貢に 宛てたもので

「死亡せば即刻開披すべし」と 表書きがあり 位階勲等の辞退 死亡通知や死亡広告の文案 葬式の手筈などが 指示してあった

▽残り3通は「葬式後、開披すべし」として

そのうち2通は 浅夫人の生計が 成り立つような 細やかな配慮 生前 世話になった人々への 遺産贈与や 形見分けなど いかにも 原らしい 行き届いた人柄を 表わしたものだ

生死の境にたったことがないから慢心したのだろう」

山県ほど、権力に執着した政治家はいないが、「山県の耳」と言われたくらい、よく情報を集め、時勢の変化にも敏感だった。陸軍の倒閣運動が、藩閥対国民、陸軍対国民の争いになる、との予感を持っていた。

位人臣を極めた桂としては、淋しい最期だったが、「大正政変」が政党政治への序幕となる。立憲同志会は、憲政会、民政党と名前を変え、政友会と共に戦前の2大政党時代を作る。

—— 原は「清貧」の政治家だった ——

選挙資金調達の達人で、政友会の資金は原が大体やり繰りしたものだ。大晦日には、金がなくて年を越せない党員が、駆け込んで来る。原はそれに備えて大晦日は自宅にいるのを常としていたという。

苦学して役人になってからも、かなりの金欠病で、明治22年、農商務省参事官時代(33歳)、来客に鰻をご馳走して代金80銭を通帳にしようとしたところ、「今月から現金で願います」友人に借りて払ったが、日記に「余が財政不如意は今に始まりたる事にあらざれども近来殊に甚だし」

組閣の大命を受け、エナメル靴を履こうとしたところ、底がすり減っていたのを、多くの人が見ている。家も部屋数5室、質素なものだった。

原は50歳の時に離婚、後妻の浅夫人は、同じ岩手県出身。新橋で芸者をしてきた人だが、「よく出来た賢婦人」評判が高かった。家計を助けるため、古新聞、古雑誌を売って、貯金していたという。

▽最後の1通は「政治関係分」97万5千円

うち82万5千円は 総選挙の寄付金の残額

— 公私の別、潔癖な金銭感覚 —

「余の死後は余に継いで政友会総裁たる人に内密に引継ぐべし。此引渡並に斯る金のあることは絶対に秘密を要す。くれぐれも漏洩すべからず。他に漏洩せば余に継いで総裁たる人の迷惑となるのみならず、又他の誤解等を生ずることあるを恐るるなり。但此金は一銭一厘と雖も不正醜穢(しゅうわい)の金にはあらず。余は金銭のために人の非難を受くることは終生の心掛にて之を避くることに周到の注意を来りたれば、一銭一厘と雖も曖昧不正のものなし」

▽残り15万円は「原田二郎預りの通帳」

遺書には こう書いてあった

▽鴻池の大番頭 原田が来て

「君の財産が多くないことは承知している。今の家は借地だから、立退かねばならぬことがあるかも知れないし、住宅買い入れの必要もあるだろう。そうでなくても老後になって資金がなくては困るだろう。自分は何ら君に求める所はない。ただ政治的行動に賛成するものであるから是非受け取ってくれ」

▽断っても 承知しないので

止むを得ずに 好意に対して受け取ったが

「死後はこの通帳のまま返還すべし」

▽原の遺書には 清冽な清々しさ

— 原田に返された15万円 —

原田の話だと、原は「内閣が倒れたら、ただ一人、床次(たじ)が生活に困るかも知れない。その場合の援助に使ってもよければ、預かっておくことにしよう」

原田は、原の意を汲んで15万円をそのまま床次に贈った。床次は「原の形見」として有り難く受け取ったという。

床次 竹二郎(とこなみ たけじろう)

慶応2(1866)～昭和10(1935) 鹿児島生まれ。内務省に入り樺太庁長官、内務次官、鉄道院総裁を歴任。大正4年、政友会から衆院議員。当選8回。原内閣、高橋内閣内相。13年政友本党を結成し総裁。のち政友会に復帰し、犬養内閣鉄道相。昭和9年党議に反し、岡田内閣逋相に就任したため政友会を除名された